全学バリケードをもって"反産協"の団結を、更に大胆に前進せしめよ！

斗う学友諸君！

東大斗争は、今、決定的に重大な局面に突入している。それは個別東大斗争というにとどまらず、全国の教育斗争ひいては日本階級斗争の今後にとっても重大な局面である。

東大斗争に於ける〝反産協〟の団結は、それが巨大になればなるほどそれに比例して巨大な〝恐怖〟を生み出してきた。そして、今、〝反産協〟の団結は、単に資本とその〝忠実な〟番犬＝民青、「良識派」連合一体となった集中砲火および大学当局のみならず、日共＝民青、「良識派」連合一体となった集中砲火および大学当局のみならず、日共＝民青、「良識派」連合一体となった集中砲火の真只中で厳しい試練にさらされている。

全国の教育をめぐる斗いが、なかんずくブルジョア教育の中枢をなす東大において於ける斗いが、〝反産協〟という一点においてブルジョア教育の神経に触れた瞬間から、支配階級にとって教育をめぐる斗いはもはや許し難いものとなった。現行の教育への介入、支配の体制では手ぬるいとして、自民党極右派の文相・灘尾は、新たに中教審への諮問を発し、更に組織的な弾圧の準備に着手した。そして東大斗争に対しては、〝東大処置〟という恫喝を加えつつ〝秩序派〟の登場を要請している。

政府権力の介入に対しては表向きには、「大学の自治」を掲げつつ、その実、自主規制を本質的内容とする〝国大協路線〟の下に文部当局に屈服してきた大学当局は、〝反産協〟の団結の前に完全にその方針を失い、暖昧な態度に終始している。曰く――「若さ、対話、改革」。そして、その内実は、「学生との対話そこ」、「医局の封建制を除去して近代化を」、「処分未完徹底における事実誤認の非を認めて再審査を」、「機動隊導入、一期の不適当と自己批判して今後は適切に」等々。

この文部当局のむき出しの恫喝と大学当局の「民主的」ポーズでは、学生、院生、教職員等の小市民的恐怖と幻想を分ちたてつつ、急速な〝秩序派〟の形成を促している。商業新聞が「良識ある一般学生の登場」と歓喜し、おだてあげたこの〝秩序派〟は、今二千名にのぼる有志連合として自らを開示しつつある。彼らは、一方では文部当局の「東大処置」の恫喝の前に「おらが大学」へしがみつく俗物根性をさらけ出し、他方ではバリケードの撤去の前に「暴力学生の行き過ぎ」憤慨の対象をすり替える陰湿もつまいさを暴露し、又、東大斗争の全国化に対して狭小な「東大心」を持ちたてられて「他大学生の介入反対」の独切り声をあげている。

そして〝反・反産協〟の統一戦線の一翼に参したのが、わざ「前衛」＝日共である。東大斗争は、きたるや、しかも決定的に、日共＝民青の「民主化路線」の破産を宣告した。一時は、東大十学部中九学部の自治会権力を掌握していた日共＝民青は、今では、理Ⅰ、理Ⅱ、医学部を除いてほぼ全学に少数派に追い落され、全国からかり集められた日共、地区民青ガバルト部隊の物理的によって辛じて命脈を保っている。〝秩序派〟をかけた日共＝民青は、物理的に〝反産協〟の団結を解体し、その二次によって資本とその権力の怒りを帳消しし、大学当局の感謝状を奉呈しようとして

東大全学反帝学生評議会